

# 西安事件の原因に関する一考察

——張学良の思想を中心として——

永橋弘价

## 目次

- 一 張学良の生立ち
- 二 日本勢力との訣別
- 三 蔣介石と張学良
- 四 張学良と紅軍
- 五 西安事件における張学良と中共
- 六 西安事件の原因

## 一 張学良の生立ち

### 滿州王の息子

張学良字漢郷は、一九〇一年(明治三四年)に緑林の王張作霖二七才の長男として生れた<sup>①</sup>。張作霖は学良を奉天軍閥の後継者とすべく英才教育を施した。張学良は、幼なくして、米国人の家庭教師に西洋の学問を教えられた。一六才で、父に督軍親衛隊に入隊させられ、士官見習として、奉天軍司令官の雑用係をしながら、父の手元で軍隊生活の基礎を修得した。一九才の春(一九一九年三月)には、父張作霖の創立した軍幹部養成学校「東北三省陸軍講武学堂」に一期生として入学し、同年の四月には督軍親衛隊第二連隊長に就任した。翌一九二〇年、同校卒業と同時に、二〇才で砲兵大佐に任命され、奉天第一混成第二旅団長となった。彼がこのような異例の昇進を遂げたのは、張作霖の子であったばかりではなく、学良自身が頭脳明晰であったからだといわれる。同年七月安直戦<sup>②</sup>が開始されると、直隸派と結んだ父張作霖に従って関内に出陣し、連戦連勝の功によって一一月には陸軍少将に昇進した。

一九二四年九月、第二次奉直戦が発生すると、副軍長郭松齡とともに奉天軍の第三方面軍を率いて、呉佩孚、馮玉祥の率いる直隸軍の討伐に向い、長城を越えて北支に入り、これを撃破した。張学良は、弱冠二四才で師団長となり、二五才で軍長に栄進した。

## 張学良の思想形成の背景

一九二五年十一月に張作霖に反逆して殺された郭松齡は、張学良の副軍長であり、講武学堂の恩師でもあった。郭は北京将校研究所と陸軍大学の出身で、東北軍の中で、日本の勢力をバックに幅を利かせる楊宇霆等の日本の陸軍士官学校出の親日派に反感を持つ民族主義思想の持主であった。<sup>④</sup>

張学良は、「東北三省陸軍講武学堂」で郭松齡に学び、その後しばらく軍を共にしたので、その民族主義の影響を強く受けた。

また張学良は幼少の頃に、アメリカ人の家庭教師によって教育された関係上、英米人との交遊が多く、特に、キリスト教の青年牧師達と親しく交わり、教化される面が多く、青年時代の思想形成上大きな影響を受けた。<sup>⑤</sup> さらに一九二八年暮には、オーストラリア人ドナルドを顧問にするなど、欧米を重視し、日本を侮る傾向があった。これは、英語が得意で、「英国式に育てられ、日本語を解せず、本当の日本を知らなかったからだ。」との説もあるが、それは彼の極わずかな一面を示すものであって、全てではない。

彼は、若い時から民族的な思想を持っており、「国家社会のために何かをやらなければならない。」「国内に居る者は皆兄弟であり、中国が平和になって、はじめて外国に對することが出来る。」<sup>⑥</sup>と考へ、「民族的な独立と、国内的な統一をしなければならぬ。」と強く意識していた。<sup>⑦</sup> 張学良は二〇才の時、日本を訪問しているが、この時に、日本側が軍事力を示威したことが、彼に「抗日の決意」と「民族としての団結の意識」を育ませたといわれる。だが彼に抗日意識を最も強く植えたのは一九一〇年代後半に台頭してきた反日運動、五・四運動であったと思われる。これ等の運動が若い学良の心に強い共鳴を呼び起し、民族主義思想に目覚させたのである。

## 二 日本勢力との訣別

### 満州と中央政府の協調

一九二八年六月、父張作霖が謀殺されると、これを日本軍によるものと信じた張学良は、表にこそ、素振りにも出さなかったが、心中深く、日本に対する激しい恨みを抱くようになった。<sup>⑧</sup> 彼はこの時の気持を「父の仇は天の仇より憎し」と述べている。

張作霖の跡を継いで奉天軍閥の領袖となった張学良は、国民政府に恭順の意を表明し、同月中旬には、奉天督辦に任ぜられた。ここに東三省は中央との一体化への道を歩み始めた。張学良は、七月二二日を期して、青天白日旗を掲揚することに決定した。しかし林久治郎奉天総領事を通して、「東三省の易幟と国民政府への服従に反対する。」との日本政府の意思表明に接すると、彼は、これを延期した。

一九二八年七月一日、東三省保安総司令に就任した張学良は、蒋介石をはじめ革命軍の指導者達に「国民會議を提唱し、国家組織が完成した暁には、東三省も新しい国家組織に従う。」旨通電した。彼は、たとえ日本との妥協を果しても、やがて父の轍を踏んで、中国ナショナリズムと日本の要求の板挟みとなって、身を亡ぼすことになる<sup>⑩</sup>と考え、国民政府との妥協をはかり、南京の勢力をバックに、日本に対抗する方を選んだのであろう。しかしながら、彼の当初の行動は慎重であった。

一方では林総領事の説得に応じて、七月二二日に「当分の間、国民政府との妥協交渉を停止する。」旨を表明しな

がら、他方においては、南京政府に対しても「日本の干渉により交渉を停止するのは遺憾だが、中国統一に関する余の態度に変化なし。」との釈明電報を打っている。<sup>⑪</sup>

### 易幟断行

なんとしても、張学良を日本側に向かせたい日本政府は、張作霖の葬儀参列を口実に、林権助を田中総理の名代として派遣し、張学良と会談させた。その結果、張は日本の勧告を入れて、三ヶ月間、国民政府との妥協交渉を中止して、形勢を静観するとの意思表明を行った。この三ヶ月の間に、日本は張学良に満足を与えるような働きかけを何一つ行わなかったもので、彼はついに、同年二月二十九日、日本の反対やその他の諸種の抵抗を押し切って、東三省全域に青天白日旗を掲げて易幟を行ない、「中山先生の三民主義は、前大元師の夙に賛助せる所にして、孫・張提携は之が為なり。……こゝに我等は、前大元師の遺志を継ぎて統一を計り、和平貫徹を決し、即此に即日三民主義を奉じ、国民政府に服従し、旗幟を改易する。」<sup>⑫</sup>ことを宣布した。張学良が国民政府との積極的な妥協政策と抗日スローガンを闡明にするのと時を同じくして、国民政府は、東北边防総司令部を設置し、その総司令官および東三省政務委員会委員長に張学良を任命した。こうして東北軍は国民政府軍の指揮下に入り、満州の中央合流が実施された。<sup>⑬</sup>

### 親日派の排除

東北边防総司令官となった張学良は、奉天軍閥の内部抗争を終結して支配権を確立し、東三省の基盤を強化するための行動に出た。

張作霖爆死後は、奉天兵工廠督辦楊宇霆は要職には顔を出さず、常陰槐を黒龍江省長に任ずるなど、腹心の部下を各方面の要職につけ、隠然たる勢力を誇り、ことごとく張学良の政策に反対した。楊宇霆と常陰槐の二人は、上司を上司として扱わず、張学良の反対勢力となる様相を呈して来た。二人をこのまゝにしておくと、郭松齡と同じように、内部分裂の原因になると感じた張学良は、一九二九年一月一〇日、張家第一の日本通で、最も影響力のある親日派のこの二人を殺害した。張は二人を麻雀にことよせて、大帥府に招き、その内庭で「謀叛」を企てたかどで、側近の衛兵に命じて銃殺した<sup>⑭</sup>。このようにして異分子を排除した張は、張作霖等の旧派を糾合して支配権を確立し、東三省の中央化に邁進した。

張学良が反日態度をとり、国民政府に接近したのは、たゞ単に、父張作霖が、日本軍に暗殺されたからだけではない。内戦の阻止と中国統一を望み、この実現について蔣介石に大きな期待をかけていたからである。

### 国権回収計画

先にもふれたように、張学良は中国ナショナリズムの新潮流に共感し、常に民族の独立を考えていた。彼は民族独立と主権回復の手始めとしてソ連からの東支鉄道の強行回収を企ててソ連との紛争を起してこれに敗れた。日本に對しては、東大、西大、南大の三大幹線鉄道の敷設を決定した<sup>⑮</sup>。この鉄道の起案書には、これ等をさらに「北寧線に集中し、良港を築きて、物資の捌け口を作らば、単に満鉄の死命を制しうるのみならず、東支鉄道に重大な脅威を与え得べし<sup>⑯</sup>」と書かれているように、満鉄との競走線、併行線となる鉄道を建設しながら、日本締出しの経済政策を次々に実行に移していった。

大連、旅順の繁栄を奪い、満鉄を立ち枯れに追いやるうとした張学良は、一九三〇年四月には、日本との協定を無視して、満州鉄道と競合する葫蘆島を起点とする幹線鉄道建設計画の実施に着手し、オランダ資本の財政協力を得て、七月には、張自らが参列して葫蘆島の築港起工式を盛大に行った。<sup>21)</sup>

### 三 蒋介石と張学良

#### 中国軍政のナンバー ツーに就任

一九三〇年五月に閻錫山、馮玉祥、汪兆銘等が連合して北平に国民党拡大会議派を形成して、反蒋介石の軍を起した。中原大戦が始まると、蒋介石は六月に張学良を中国陸海空軍副司令に任命し、援軍を送るよう要請した。キャスティングボードを握った張学良は、しばらく形勢を静観した後、九月になって、国民政府側が敵の内訌に乗じて、にわかにな勢を盛り返すと、中央擁護の旨を蒋介石と閻錫山に通電し、武力調停と称して蒋介石側に立って参戦することを闡明した。これを見て、閻錫山は直に兵を引き、大勢は蒋介石軍に有利に傾いた。張学良の武力調停によって、中原大戦は、蒋介石側の大勝利をもって終結した。

一九三〇年一〇月、張学良は奉天において、中国陸海空軍副司令の就任式を盛大に行った。彼はわずか三〇才で北支の軍政両権を掌握し、軍事面では蒋介石に次ぐ中国第二の地位に立ったのである。十一月には、南京に蒋介石を訪ねて就任の挨拶を行った。この時、彼は蒋介石をはじめ、多くの国民政府の要人と接触した。蒋介石との会談では、「中国統一」に関して次のように述べている。

(一) 列強の侵略を食い止め、真の独立を達成するためには、中国統一が、前提となる。統一を乱す行動は許されない。

(二) 内戦は、国力を弱め、国民を苦しめ、帝国主義諸国を喜ばせるだけなので、武力による統一や圧政による民衆統治は、しないでほしい。

(三) 内戦を起した、閻錫山、馮玉祥、李宗仁等の軍閥を、寛大に取扱ひ、窮鼠猫を噛む状態を作るべきではない。

(四) 蔣介石を、中国を救う英雄として認めるのに、客かではないし、領袖と仰ぐことには、完全に同意する。蔣の方も、国民政府内の大物、或は他の軍閥に対しても一視同仁の姿勢で、いてもらいたい。これは、共産党に対しても、同じである。<sup>22)</sup>

### 張学良と汪兆銘の対立

一九三二年九月一八日に勃発した満州事変に際して、張学良が、無抵抗の状態で奉天から錦州へ退りぞぎ、満州を失うと、抗日と彼に対する非難とその責任を問う声が中国全土に高まった。一九三二年一月に錦州が、日本軍に占領されるや、張学良の責任問題は、さらに重大化した。行政院長汪兆銘は、満州喪失の責任者を処分すべきだと、張学良を責めたので、蔣介石は、やむをえず、張の河北綏靖主任の職を解いた。

張学良解任の発端は、張が一九三二年七月二六日から二九日にかけての北平で開かれた華北軍事会議の結果に基づき、熱河防衛に必要な軍事費三百萬元を中央政府に要求した事にある。

この要求を受けた汪兆銘は、一九三二年八月六日、張学良に対して大要次のような通電を打った。



貴方は、昨年奉天を放棄し、錦州を失い、三十万の人民と数十万里の土地を敵に委ね、そのために敵の戦意を高め上海まで侵略させる結果となった。しかも貴方は、因循年を越したために、日本軍はついに熱河まで窺うようになった。貴方は最も多くの兵力を持ち乍ら、敵と戦わないのは、中国人としての義務をおこたるものである。貴方は満州事変後五百万元の軍費を要求したので、中央政府は四百万元を送ったばかりであるのに、またもや熱河軍事費として三百万元を要求して来たが、口でだけ抵抗をとなえ実行しない者に、この上人民の膏血を絞った軍事費を送ることはできない。自分は貴方を失望させた責任をとって辞職するが貴方も辞職して四億の人民に謝罪せよ。<sup>24</sup>

この刺し違え通電と共に汪兆銘は国民政府と中央執行委員会に辞職を申し出た。汪は抵抗に名を籍りて、いたずらに金を要求する北平綏靖主任張学良の辞任を職を賭して要求したのである。<sup>25</sup>だがこの時も、蒋介石は張を庇い続けた。蔣は行政院会議の決議に従って張の河北綏靖主任の職は解いたが、直に、新設された河北軍事委員会分会委員長代理にしたのである。これは、名称こそ変れ、これまでと何等異るところがないどころか、蒋介石の代理として重みを増すことになった。この措置に憤慨した汪兆銘は、病氣加療を理由に休暇をとり、フランスに外遊した程である。

汪兆銘は、張学良の無抵抗を非難攻撃しているが、この時は、国民政府自身に対日抗戦の用意も意思もなかった。<sup>26</sup>このような状況で張を責めるのは酷であろう。さらに、張があえて日本と戦わなかったのは、彼に戦意がなかったのでも、自軍の兵力温存に汲汲としていたからでもない。「危険を更に激化するような抵抗は止めて、ケロッグ条約と九ヶ国条約に従って発動されるはずの、諸列強の決定を待て」という蒋介石の指令に従ったのだ。

満州事変勃発後わずか数ヶ月で日本は満州全域を占領した。この間、張学良は、蒋介石の命に従って、無抵抗の姿

勢をとり続けたが、彼に取つても、故郷の山河が、日本軍に蹂躪されるのは、耐え難い苦痛であり、屈辱であつた。<sup>28</sup> そのみならず、軍人としての体面もあり、何度か抗日戦を決意したが、当時は、酒色とアヘンに溺れており、体力も氣力も欠けていて、それが出来なかつた。<sup>29</sup>

### 張・蔣の軋轢

一九三二年二月、満州国が成立すると中国人民の抗日排日運動はさらに激しくなり、全国規模の広がりを見せるようになった。

一九三三年三月四日に、熱河が日本軍によつて占領されると、中国全土の人民が憤激して、政府の無抵抗主義、特に北支の責任者張学良を非難攻撃したので、張学良の威信は地に墜た。<sup>30</sup> 国民政府は、満州事変の時と同じく、熱河失陥の全責任を張学良に転嫁した。国を挙げて彼を「不抵抗將軍」と呼んで、その無氣力を詰つたが、熱河において、湯玉麟の指揮下にある東北軍の一部が、日本軍に敗北したのを聞くと、張学良は、全軍を率いて、陣頭に立つて戦おうとした。<sup>31</sup> 彼は一九三三年三月八日、河北省保定において、蔣介石と会見し、中国陸海空軍副司令として、抗日戦争に赴くことを要求した。辞表を片手に、抗日抗戦に踏み切ることを強く要請し、「もし、蔣総司令官が、対日無抵抗方針をとり続けるのであれば、自分を解任するように。」と迫る張学良に対して蔣介石は、「今の中国の情勢は、狂瀾怒涛の中の、小舟のようなものだ。この舟には、一人しか乗れず、二人乗れば「全国の憤激の波で、ともに」沈んでしまう、ということ、君が下りるか、私が下りるかしかないのだ。」と告げた。<sup>32</sup> 蔣介石に、抗日の意思の無いことがわかると、張学良は、「では私が下りましょう。」と辞表を手渡して退席した。<sup>33</sup>

世論の非難を一身に負った張学良は、引責辞任の形で、職を退かざるを得なかったのである。蒋介石は直に、その後任として、腹心の部下、軍政部長何応欽に軍事委員会北平分会長を兼任させ、北平常駐を命じた。<sup>34</sup> 満州の失地回復と抗日を主張する張学良の下野は、日本との衝突を回避するとともに、北支の軍事、政治の実権を蒋介石に移す結果となった。

一九三三年四月一〇日、要職を離れた張学良は、健康回復の名目で、二人の妻、ドナルド、イタリア上海総領事チアノ伯（後のイタリア外相）と共にヨーロッパに出発した。張学良の外遊は蒋介石による追放と見る者もいるが、蒋介石自身は「世間では張学良を追い出したのは、自分の業だなどといっているが、北方諸将領が不信任表明の主唱者ではなかったか。」<sup>35</sup> といつて否定している。張学良は、日本軍の熱河侵攻に際して、有効な抵抗をしなかったため、中国国民全体の憤激を買ったので、蒋介石も、北平軍事会議の決議に従って、張を罷免せざるを得なかった。しかし、もとを正せば、張の無抵抗は、蔣の命令によるものなので、好意的に「ヨーロッパの諸事情研究」の名目で、張を熱りが冷めるまで、外遊させたのが真相であろう。

一九三三年五月三十一日には、対満州不侵略条約ともとれる塘沽協定（北支停戦協定）が結ばれ、長城以北全域が関東軍の支配下に入ると、張学良系東北軍の大部分と満州出身の多くの知識人や学生は、関内に逃がれた。これらの兵士と抗日青年達は、常に故郷満州への郷愁と抗日意識を抱き乍ら、関内を流浪しなければならなくなった。

### 三省剿共副司令になる

張学良は留学一年後の一九三四年一月八日に、上海に帰ってきた。この帰途に、香港で胡漢民と会談しているのを

見て、彼が反蔣側に廻り、反蔣勢力を形成する可能性もあった、と見る者もいる。しかしながら、ナチス・ドイツとファシスト・イタリアの興隆に、強い印象を受けた張学良は、中国の唯一の指導者は蒋介石であり、蒋介石を中国のヒットラーやムッソリーニにして、中国の統一と発展をはかる以外に、満州を日本から取り返す方法はないと信じ、「四維学会」等を組織して、この運動を始めたのを見ても、蔣に弓を引く気は無かったと考えるのが、自然である。「西安事変懺悔録」によれば、帰国当時、張は「日本に激しい憎しみを抱いたのは、日本人が東北人に横暴であり、父を殺し、九・一八の暴挙を行ったからである。抗日戦に備えて、中央の同志達と共に戦える状態を作るためにも、蔣先生の秘書室主任になりたい。」と考えていた。十数万の軍を擁し、蒋介石の一大敵国となりうる勢力の、張学良のかかる忠誠は、張学良の民族主義のなせるものであった。しかし彼のこの希望はかなえられなかった。

一九三四年三月、蒋介石は、張学良に対して河南、湖北、安徽の「三省剿匪副総司令」として、武漢に駐在せよ、との命令を出した。同年四月、張学良は、武漢に着任し、前記三省の防衛に当ることになり、北京、天津に散開していた、東北軍を自分の任地に移し、何柱国の五七軍を湖北省に、王以哲の六七軍を河南省に、于学忠の五一軍を武漢周辺に、劉多荃の一〇三師を張学良直轄に配備して、再び旧東北軍の基幹部隊を、統帥するようになった。張学良は心を新にして、祖国の危急を救い、部下の期待に応えることを決意し、日本に対する敵愾心を燃やしつつ失なわれた父祖の地、満州の回復を常に心に期していた。

#### 四 張學良と紅軍

##### 張學良剿共任務につく

一九三四年一〇月末、中国共産党が、江西省瑞金に築いていた「中華ソビエト共和国」は蒋介石の度重なる包圍攻撃のために崩壊し、中共軍は「二万五千華里の長征」の名で知られる、中国西北地方への逃亡の旅に出なければならなくなった。

陝北に共産軍が流れてくるようになると、一九三五年五月国民政府軍事委員会は河南・安徽・湖北三省の「連合剿共司令部」を創設して、その司令官に張學良を任命し、陝北の共産軍の討伐にあたらせた。剿共司令官になった張はしばしば地方視察に出かけたが、ある時、武漢大学で学生達の「抗日政策をとれ」との抗議を受けて、民衆の恐れられているのは、共産党勢力の浸透ではなく、このまゝ事態が推移すれば中国はやがて満州のように、日本帝国主義の支配下に入るのではないかとこの恐れであることを知った。国民の心が抗日に向いている時、「排日運動を禁止し、抗日を叫ぶ共産党を取り締まるのは間違っているのではないか」との疑問を抱くようになった。その上、彼の側近には黎天才、苗劍秋、孫銘久等がおり、その影響によつて日本への敵愾心を更に深め、次第に客共対日強硬論者になっていった。

一九三五年のはじめから、再び行動を活発化させた日本軍は、同年六月には、排日運動抑圧のために「梅津・何応欽協定」を支那と結ぶことに成功した。先ず国内を統一し、その後で、外敵に対抗することを基本政策とする蒋介石は剿共作戦に全力を傾注していたので、この協定を結ぶことによつて日本との妥協をはかり、日本の要求を入れて、

排日貨運動や抗日運動の団体や組織の活動を厳しく取り締まった。

満州事変以来の日支間の諸種の紛争は、支那経済をますます悪化させるとともに、主権領土の完整に脅威を与え、民族的危機をもたらしたが、南京政府はこの危機を打開すべき毅然たる態度をとらなかつたのみか、このような条約を結び、対外的な圧力を利用して、反対勢力を圧迫し、その独裁制を強化しようとしたのである。

これを見て張学良は、国民政府が自分に与えた政策に疑問を持つようになり、やがて「我國民は、まえに私のことを『不抵抗（将軍）』と罵倒したが、私は現在、わが指導者が、私の任務を剿匪任務から、日本帝國主義への積極的抵抗へと変えてくれることを希望する。こうした剿匪作戦で我々が蒙むる犠牲は、日本に抵抗して出る犠牲程には価値がないと確信する」ことになった。更に宗哲元が日本の圧力によって辞職させられ土肥原・秦徳純協定が成立すると「九月一八日以後、われわれは國際連盟に提訴し、その他いろいろの平和協定に訴えれば何とかなると考える誤謬をおかした。その後退却した我々は、外部からの支援を望んだ。しかし今は、こうした幻想はすべて消えうせてしまった。我々が、自力で立ち上がり、生死を賭けて闘わねばならないことは明瞭であつて、今こそ南京政府は、日本軍に抵抗すべく、国の総力を動員すべきであらう。」と述べて、蔣介石に対する不満を露にした。

### 無抵抗は本心にあらず

同年六月、蔣介石は、張学良を呼んで、共産軍討伐のために、中国北部に出動してもらうかも知れない、と伝えた。張学良は、蔣介石の「先安内後攘外」「剿共は日抗より重し」すなわち、外敵を撃退するには、先に国内を平定しなければならぬ、日本に対抗するためには、先ず剿共しなければならぬ、革命の敵は、日本ではなく、やはり共産

党だ、<sup>④</sup>という考えには、同意できなかったので、辞職して、もう一度外遊したいと申し出たが、受け入れられなかった。

先にも述べたように、張学良の本心は、無抵抗や、剿共を拒否し、断固として、対日抗戦を実施するところにあつた。同じ中国人である中共軍と闘う、兄弟牆に闘ぐような、戦いよりは、日本軍と戦つて、その犠牲になることに、価値を認め、誇を感じていたのである。張学良は、直に無抵抗政策を中止し、全国民が一致して抗日政策を推進することを強く望んでいた。<sup>④</sup>

### 東北軍の赤化

中国に対する日本の行動は、中国の反日世論を呼び起した。一九三五年六月、梅津・何王欽協定が結ばれ、華北諸省を失う危険に曝されると、更に激化し「日本の侵略に抵抗せよ。」というスローガンは左翼知識層だけでなく、これと対立する軍閥によつても使用されるようになった。このような抗日運動の高まりの中で、中国共産党は、一九三五年八月に各党・各派・各軍は、政見利害の不同に関係なく、一致して抗日救国に向かわなければならない旨の「八・一宣言（抗日救国のために全同胞に告げるの書）」<sup>④</sup>を発表して抗日統一戦線の結成に努力した。その結果、一九三六年、六月頃にはほぼ、抗日戦線は完成し、一九路軍、広西軍、二九軍、全国学生救国連合会、全国各界救国連合会、著作人協会、文芸家協会等を含むようになった。容共が「抗日」の看板をかぶつた一大国民運動と化したのである。<sup>④</sup>この宣言は、拳国一致抗日政策を主張する張学良にも大きな衝撃を与え、抗日戦線に加わりたと思つたが、蒋介石の命令に抗しきれなかつた。一九三五年十月、彼は西北剿匪副総司令となつて東北軍一五万を率いて西安に進駐

し、共産軍討討に従事することになった。東北軍は戦う度に敗れた。共産軍は、捕虜の東北軍将兵に「内戦停止、一致對外」即ち、中国人同志が戦うのを止めて、全国民が一体となって外敵にあたるように教育し、洗脳しては釈放した<sup>④④</sup>。原隊に帰った捕虜達は、しきりに共産軍と共同戦線を張って日本軍に抵抗すべきだと説いた。東北軍と西北軍の前線は、絶えず、共産軍と接触している間に、いつの間にか、共産軍の宣伝に乗せられて、赤化していった<sup>④⑤</sup>。

陝北に移駐させられて以来、張学良の経済基盤は次第に失われ、中央政府からの軍費も削られ、共産軍との戦闘で兵力も減少し、装備も消耗し、飢餓と寒気に悩まされるようになった。これに加えて、満州への望郷の念から、失地回復の夢を描く東北軍の将士に、全国的な高まりを見せる抗日運動は大きな影響をおよぼし、反蔣・抗日の意識は更に強まった。

共産軍との内戦を停止して共に抗日戦線を張るべきである、との主張は東北軍の将兵、中でも下級兵卒層の共感と呼び張学良軍は次第に戦意を喪失して行った<sup>④⑥</sup>。紅軍に捕虜になった将校達が戻って来て共産軍を賛美するのを聞いて、張学良自身も「剿共は、もはや見込みがない、共産党と連絡をとり、剿匪を停止して戦力を温存し、共に抗日にあたる<sup>④⑦</sup>」べきだと考え始めた。中国共産党中央委員潘漢年を主とする工作は、学良の機要秘書黎天才の協力を得て、東北軍の陝西移駐後半年足らずで、東北軍の赤化に成功したのである<sup>④⑧</sup>。

### 容共連蔣

張学良は、自ら中共の指導者達と直接交渉を行うことによって「彼等を説得し、蒋介石の下に投じらせ、一致して抗日に向わせることが出来る<sup>④⑨</sup>。」と考えるようになった。彼は劉鼎の仲介によって、上海西方郊外のレストランで、



中国共産党の上海地域の責任者、潘漢年に会ったが、張は中共を説得して、投降させようとする態度に終始したので、話は進まなかった。<sup>50)</sup>

—このような状況下で一九三五年一月二八日に出された中共の新しい「抗日救国宣言」は、更に強い衝撃を張学良麾下の将領、兵士に与えた。部下の感化は上官に反映し、張学良の考えはますます抗日統一戦線形成へと傾いて行った。

一九三六年学生運動に対する弾圧が強化され、東北大学の学生が多く逮捕された時、学生の代表者達が校長である張学良に訴えるために西安を訪れた。この時学生のリーダーが「このまゝ、蔣介石が日本に降伏を続けても委員長を信任するののか。」とたずねた。これに対して張は、「勿論。抗日戦の前に先ず中国が統一されねばならない。私は蔣委員長を信頼している。」<sup>51)</sup>と述べ乍らも他方では、剿匪総司令部、西安綏請公署の中堅、若手将校五〇〇人の前で、学生指導者に、容共・愛国運動の擁護、日本帝国主義の打倒、内戦停止を主張する講演を行わせている。

一九三六年張学良は剿共作戦の督促に來た中央軍の将領や閻錫山の將兵を前に次のように述べている。

連盟に頼めば中国が救われると思うのは幻想にすぎない。自己の苦難を救うのは自己の努力以外になく、他国の力をあてにしてはならない。自分は閻錫山閣下が、わが東北軍の轍を踏むことなく、全中国の愛国の軍隊と肩を並べて、日本軍の侵略に抵抗されんことを心から望むものである。<sup>52)</sup>

この頃になると、張学良は、共産軍と戦う意思を全く持っていなかった。

## 張・周會談

張學良が上海で潘漢年に會つた後で、中共からの使者李克農が、西安近くにいる東北軍の所にやって来て、彼に抗日のために中共が国民党と合作する条件を出した。張學良は、この提案を蔣介石に伝えることを約束すると共に毛沢東が周恩来に會いたいので来るようにと言つたところ、李克農は「貴方が誠実なら毛沢東、周恩来が訪問するようにとり計らいましよう。」といつて北へ歸つた。やがて「周恩来が會いたいから日時を指定してほしい。」との返事がきた。張學良は、延安の教会で周恩来と會つた。<sup>⑤③</sup>張・周會談は一九三六年の二月下旬と三月の二回にわたつて行われたといわれる。周恩来との會談で張學良は、中央はすでに抗日を準備していること、蔣介石が国家のために一生懸命努力していること、広田三原則を承認しないことを話し、抗日のためには「擁蔣」でなければならぬと説いた。周恩来も又、張學良の説得によつて蔣介石が国家に忠誠であること、抗日のためには、蔣介石の指導権を擁護しなければならぬことを認めた。<sup>⑤④</sup>このようにして共産党は、抗日綱領の下に国民党と再び第一次国共合作のような関係にもどり、蔣介石の指導を受け入れることを決意して、その具体的な条件の討議に入った。その条件は次のような十項目であつた。

- (一) 共産軍は、国民政府軍に編入、合同訓練を受け入れ、抗日戦にそなえる。
- (二) 協定に違反しないこと、武装解除をしないこと。
- (三) 江西、海南、南大別山等の地方の共産軍も同様に編入を受け入れる。
- (四) 紅軍の名称を廃止し国軍との同等の待遇を受ける。
- (五) 共産党は軍隊内で共産活動を行つてはならない。

(六) 共産党は一切の鬭争を停止する。

(七) 拘留中の共産黨員を釈放し、反政府、領袖攻撃以外は自由な活動を許す。

(八) 軍人以外の共産黨員の陝西北部居住を許す。

(九) 抗日戦勝利後は、共産党も国軍と同様復員帰郷させる。

(十) 抗日戦勝利後は英米等のように共産党を合法政党たることを許す。

これは中国共産党が八・一宣言以来の「討蔣抗日」から「連蔣抗日」に轉換したことを表明している。この十項目に同意した後で、張学良は「私は家の仇と国難をあわせ持つ者だ。抗日の点では人後に落ちる者ではない。上官を持つ身で自分の一存ではどうにもならないが、蔣委員長に極力進言して、この条件の実現に努めよう。」と述べ、お互いに食言しないことを約束した。<sup>56</sup>張学良は、この共産党との協定で中国の内乱はおさまり、後はすべてが、抗日に向って邁進するようになると考えていた。だが、張学良が実際に、この件に関して蔣介石と周恩来の仲介を行った事實は見当らない。

### 中共軍西安に自由に往来

一九三六年五月五日には中国共産党は、全国に「停戦講和」の通電を発し、次いで周恩来が中共を代表し、潘漢年がコミンテルンを代表して上海に着き、張冲と交渉を始めた。その後潘は更に南京に移って陳立夫と交渉をはじめ、やがて中共は国民政府の提示した(一)三民主義を守ること、(二)蔣介石軍事委員長の指揮に従うこと、(三)紅軍を解消し、国軍に改編すること、(四)ソビエト制度を解消し、地方政府に改めること、の四原則を受諾したので、後は蔣介石の決

裁を待つばかりとなった。<sup>⑤7</sup>しかし蔣は、これに決裁を与えなかった。蔣は「共產軍は弱り切っており、もう一息で潰滅させるところまで来ている、この機会に根絶しなければ、禍根が永久に残り、地方人民が禍を受ける。」<sup>⑤8</sup>と考えていたからだといわれる。事実、共産党は、陝西、甘肅の片隅に追い詰められ、かつて三〇万であった中共軍は、わずか三万となり、物資の欠乏と国民政府軍の追撃のため、非常な苦境に陥った。更にコミンテルンと一体のモスクワ政府が、国民政府との提携政策に方向転換をしたので、共産党は不利な環境の中にあり、その運命は風前の灯であった。<sup>⑤9</sup>

剿共作戦の達成が目前にあると判断していた蒋介石は、張学良と楊虎城が、中共と結びついているとの情報や、東北軍が赤化して休戦状態にあるなどの報告もあり、このまゝ、放置すれば、反乱が起きると考え、張とその将領に、中共の扇動や誘惑に乗らないように、訓示しなければならないと思っていた。

事実、東北軍の現状は、ゆゆしいものであった。紅軍政治保衛局局長鄧発が、西安の張学良の家に住み、東北軍の戦闘は休戦状態にあり、紅軍兵士を運ぶトラックが自由に西安に往来した。紅軍の兵士達は東北軍の制服を着ていたので誰も疑わなかった。<sup>⑥0</sup>更に、中共からの代表が、張学良の幕僚に加わり、東北軍を指導、訓練するありさまであった。

一九三六年九月一八日の満州事変勃発五周年記念日には、一万二千の軍民を集めて西安で抗日大衆集会が行われた。張学良は、この集会で次のように述べている。

東北軍は国防の第一線に立たなければならぬ。歴史は我々に失地回復の使命を課している。……中華民族の生き残る路は抗日あるのみ、国内を整え戦争を準備するという空虚な理由に惑わされてはならない。われわれは、全国の力を合せて長期にわたる大戦争を決意しなければならない。」

張学良は、六月には部下に対して自分の本心が抗日にあることを告げたが、この大衆集会においては、民衆に対して公然と抗日を口にしたのである。<sup>①</sup>

いまや西安は抗日、救国運動のメッカになったのである。西安の町には、蒋介石の先安内後攘外政策とは正反対の「抗日失地回復」「即時対日開戦を」等の救国標語が氾濫した。

張学良はまた一〇月三日のニム・ウェールズとの会見で、「蔣委員長が、外国の侵略に抵抗しようとするならば、いかなる場合にも、その考えに従う。」「私と西北の将領は、政府に忠誠を尽している。もし共産主義者が、外国の侵略と戦うために共同し、中央政府のもとで、われわれと協力するのを望むなら、西北では剿共を平和的に解決することができる。」<sup>②</sup>といている。

## 五 西安事件における張学良と中共

### 蔣・張の洛陽会談

張学良は延安での周恩来との会談以後、約束した国共合作の件を蒋介石に進言しようとしたが、つつい機会を失ってきた。しかし、十一月、綏遠事件が発生し、部下の抗日戦開始の要求が強硬になり、十一月二三日に、上海で、全国各界救国連合会のリーダーである七君子、沈鈞儒、章乃器、鄒韜奮、沙千里、史良、王造時、馬相伯が逮捕されると、張学良は、同月二四日蒋介石に打電して内戦を停止して、一致して抗日にあたる」ことを訴えた。

一二月三日には、洛陽で蒋介石と会談した。この会談にのぞむ張学良をバックアップするかのようになり、一二月一日、

中国共産党は、蒋介石に書翰を送り、内戦を停止し、協同して綏遠の抗日戦線におもむくことを要請している。この蔣との会談で張学良は「当面の軍事情勢および任務に関する上申書」を提出したが、その内容は次のようなものであった。

- (一) 共産軍を野戦で殲滅するのは、困難である。
- (二) 現在の中国は共産党討伐よりも、日本の侵略に対抗するために、全国民を一致団結させることが急務である。
- (三) 共産軍も「中国人は中国人と戦わない。」のスローガンをかゝげ、統一抗日戦線の結成を叫んでいる。この愛国意識を無視して、共産軍討伐に兵を動かすと、味方の少壮軍人の怒りが爆発する恐れがある。
- (四) 上海で逮捕された七君子は、ただちに釈放されるべきである。<sup>65</sup>

これを見た蒋介石は「抗日を主張する者だけが国家の将来を憂えているのではない。今は国民に隠忍自重をうながし、外患よりも、まず内憂を取り除くことが大事であり、これが革命なのだから、自分の命に従うべきだ。」ときつくなしためた。しかしながら、張学良は「自分は委員長を領袖とあがめ信頼している。ただ当面の情勢を報告し、委員長の英断を願うだけである。東北の兵士は、故郷を追われ、日本軍に家を焼かれ、肉親を殺されたものがほとんどである。これ等の者の抗日意識をおさえることは殆んど出来ない。抗日戦線を発動しない限り、部下の統率は困難である。」となおも主張した。そこで蒋介石は「それ程心配なら、近いうちに西安に行き、部下を説得することにしよ。」と西安行きを約束した。<sup>64</sup>

## 西安事件

蒋介石は内外の事情から張学良に対して、共産軍掃討をあくまでも継続するように、次々に命令を發したが、前述のように、東北軍には共産軍に対する戦意が無く、剿共作戦は進展しなかつた。業を煮やした蒋介石は、麾下の最良の将星の一人である胡宗南に剿共を命じたが、これもまた共産軍の前に敗退した。<sup>65</sup> その結果、綏遠事變の勃発を機に蒋介石は腹心の部下で、副建方面の剿共戦で勲功のあつた蔣鼎文を西北剿匪前敵總司令に任命し、張学良をさしおいて、中央軍をもつて中国共産軍の討伐にあたらせた。張学良はこの措置に憤慨し、かつまたこの仕打を怨むようになった。<sup>66</sup> 張学良麾下の東北軍も、蒋介石の遣り方に憤慨した。東北軍の將兵達は、辺境にあつて次第に兵力を殺がれ、座して亡びるより進んで蒋介石と対抗し、その進路を切開く必要を痛切に感じていた。そのためには「支那民族の世論として高揚されている抗日運動の先鋒となり、共産軍との連繫を密にして、再起の大芝居を打つのが賢明である」と、張学良に進言する者もあつた。このように張学良軍は叛乱の要因を内包していたのである。

一二月四日、行政院長兼軍事委員長であり、西北剿匪總司令である蒋介石は、張学良の東北軍および楊虎城の西北軍が憂慮すべき状態にあることと、学良との約束もあつたので、これに最後の督戦と訓令を行うべく西安に赴いた。連日張学良と協議し「なんとしても、今は、共産軍を討伐しなければならぬ。もしこの命令に違反すれば、国民政府としては、張学良を共産軍討伐の重責に置くことは出来ないで、嚴重な処置をとる」と厳命した。<sup>67</sup>

張学良は「軍民ともに綏遠への援軍が緊急であり、国をあげて援軍の派遣を信じている時に、抗日共同戦線に立つて立とうとしている共産軍と戦うべきではない。」と、暗に連ソ容共政策を強調し、激論となつた。この時以来、西安の空気が非常に不穏になつたが、蒋介石は、張学良を説得し続けた。また他の將領に対しても、新しい剿共戦を進めるこ

とを主張した。しかし、于学忠をはじめ、東北軍や西北軍の將校達は、これに反対し、共産軍と共同戦線を張り、一致して日本軍に当ることに固執して譲らなかつた。

蒋介石は、西安において、一月一日に国防会議を開催する予定で、各地の將領に、招待電報を打っており、西安には、張学良の他にも于学忠、朱紹良、邵力子、朱家驊、陳誠、蔣方震、蔣作賓、楊虎城、陳調元等の中央および西北の諸將領が多数集まっていた。この会議は、表向きは、西北地方の防備強化にあつたが、実は共産軍討伐に成績の上がない張学良麾下の軍隊を改編し、福建省に移駐させるところにある、といわれていた。<sup>⑧</sup>

一月七日の夕方の蒋介石との会谈で、張学良は、蒋介石に内戦の停止と一致抗日を訴え、激越な論争となつたが、蒋介石は頑として受けつけず、二人の対立は決定的となつた。蔣が張学良の剿共停止の嘆願を拒否した時、張学良の進退は谷<sup>よ</sup>まり、既にこの日の午後には部下の白騎馬軍長に選拔させておいた、二百名の決死隊に対して、臨潼襲撃、蒋介石逮捕の命令を一二日午前二時に下した。

張学良の叛乱軍は、同午前五時、蒋介石の宿舍である、西安郊外の華清池を急襲し、蒋介石を逮捕した。西安に集つていた陳誠、蔣鼎文、蔣作賓等の国民政府の要人達も全て監禁された。同日正午頃張学良と楊虎城は連名で、全国に向けて、叛乱の目的と八項目の要求を通電した。その大要は次の通りであつた。

我等はかつて、しばしば涕泣して諫言したが、常に斥けられたから、止むを得ず、蒋介石閣下に対して、最後の忠諫をしなければならなくなつた。その反省を促すために監禁はしてあるが、生命の安全は保証する。……南京当局が世論に従い、この八項目を採択されんことを望む。国家が将来生きる道は、これ以外にあり得ない。西北の軍民は一致団結して、以下のことを要求する。



- 一 南京政府を改組し、各党各派を入れて、救国の責任に任せしむ。
- 二 一切の内戦を停止する。
- 三 上海で逮捕された全国救国連合会の領袖七名の釈放
- 四 全国一切の政治犯の釈放
- 五 人民の集会、結社の自由の保障
- 六 民衆の愛国運動の解放
- 七 孫総理の遺囑の確実な実行
- 八 救国会議の即刻召集

南京政府は、一二日の夜、緊急会議を開き、張学良を罷免し、軍事委員会において、嚴罰に処す事を決定し、翌三日には、叛乱軍の武力討伐を決定し、何應欽が全軍を指揮して討伐にあたることになった。<sup>⑧</sup>

### 蔣介石の釈放

張学良は拘禁中の蔣介石に全国に発した電報の原文を見せ、兵変の目的を説明し、この要求の承認を迫った。

これに対して、蔣介石は「この問題は中央として充分研究すべきもので、このような不法な行為によって、私に承認を迫ることは断じて許されぬ。私を速に洛陽に帰すか、そうでなければ、私を殺しなさい。私はすでに、君の掌中にあるのだから、どちらを取ろうと君の自由だ。」と云って張の要求を拒絶した。東北軍の中には、蔣介石の処刑を主張する者もあり、困惑した張は、仲介を依頼すべく、中国共産党に周恩来招聘の電報を発信した。それと同時に、

国民政府との直接交渉をも試み、蔣鼎文にその使命を与え、蔣介石の親書を持たして南京に帰した。監禁を解かれた蔣鼎文は、一八日南京に入り、南京政府に蔣介石の親書と張学良の要求を提出した。

何應欽宛の蔣介石の親書には、「学良討伐の中央軍は、一七日から 南方面で攻撃を開始したと聞くが、直に攻撃を中止せよ。私は一九日中に帰京することになったので、一九日以前に両軍が衝突することは絶対にさげ、直に爆撃を中止することを要す。」と書かれていた。

国民政府は、一二月一六日に張学良の討伐命令を出し、東北軍を爆撃させる一方、一二月一九日には宋子文を、私人の資格で、西安に送り、妥協に努めた。又一七日に到着した中国共産党の周恩来も、モスクワの指令に従って、蔣介石を釈放するように、張学良を説得した。その結果、一二月二五日になって、張学良は、遂に蔣介石を釈放した。

張学良は「東北軍の統率者がいなくなる。その上、学良自身にも不利になるから、西安にとどまれ。」という蔣介石の言葉を押切って「この事件によって、委員長に危害を加える意思も、個人的野心もなかったことを、自分が証明する。」ためにも南京に行くといつて、蔣介石の飛行機に同乗した。

一二月二五日午後五時二〇分、蔣介石は張学良をともなって、日没の洛陽飛行場につき翌朝洛陽発、一二時に南京の飛行場に降り立った。蔣の生還は全中国国民の大歓迎によって迎えられたが、張学良はこの日をもって人生の半分以上六〇年近くを幽囚の身として送ることになった。

## 六 西安事件の原因

西安事件は「我國民革命事業の進捗にとって、著しい障害となった。過去八年間に達成され二三週間、或いは精々一ヶ月間のうちに、最後の栄冠を得る筈であった成果が、一朝にして、全く、覆えされた。」<sup>①</sup>と蔣介石が述べているように、中国大陸一〇億の人民が、共産主義の压制下に入る、ターニングポイントとなった。これが中国にとって幸であるか、不幸であるかは、ここでは問わないが、これまで見てきたように、西安事件が、張学良の私心によってなされたものでないことだけは確かである。

歴史現象の常として、西安事件に関しても、様々な見方があり、評価も分かれている。事件発生当時のこの事件の原因に関する論調は次の三つに大別出来よう。

- 一 張学良が自己の地位の回復を狙った結果とするもの
- 二 張学良がソ連および中共の謀略に乗せられた結果とするもの
- 三 前二者の複合によるもの

第一の見方は、ヨーロッパから帰国した張学良は、国民政府の中央に留ることを許されず、共産軍討伐司令として直に、漢口にやられた。紅軍討伐のために、各地を転戦させられた東北軍は、永年の剿共戦のために疲弊困憊していた。更に一九三六年三月に共産軍が北上し、甘肅、四川、陝西地方に猖蹶し始めると、学良は、西北剿共副司令として西安に移駐を命ぜられた。

西北辺境は不毛の地であり、勇猛果敢で士氣旺盛な紅軍との戦に、出費がかさむ上に、蒋介石からの軍費も次第に削られて行った。かつては満州王として、東北三省から北支にわたる広大な地域を支配し、蒋介石と相並んだこともあった張学良は、熱河戦後の塘沽協定によって、于学忠が、平津地方から追われた後は、彼からの送金も望めなくなり、一地方軍閥と化したので、現状に大きな不満を持っていた。加えて東北軍に対する冷遇とその整理編成替の動きは「張学良軍の勢力を懺滅しようとする企画ではないか」との危惧を、東北軍将領の間に鬱積させるにいたった。<sup>③</sup>

さらに、統一されたとはいえ中国軍閥や国民政府の内部にも、依然として、蒋介石の独裁に対する反蔣勢力が存在して居た。そのような情況の中で綏遠問題を中心に全中国に抗日運動が澎湃として、湧き起った。国民の「内線停止一致抗日」の強い要求にもかかわらず、蔣は、これに積極的に対処しようとしなかった。国民の南京政府に対する非難は多く、不満も大きかった。張学良は、この時に綏遠問題を一拳に解決しようとするれば、反蔣軍閥も一斉に蜂起し、民衆の支持も獲得できると考えて、蒋介石に対する憤懣を爆發させたのが、この兵諫である、<sup>④</sup>というのである。

第二の見方は、西安事件は張学良の一軍閥としての旧来の政権争奪戦ではなく、中国共産党の働きかけやソ連の支持の下に行われたとする説<sup>⑤</sup>又は、これを張学良の主導的、自発的なものではなく、赤化した麾下の軍隊中の一部によって行われ、学良がこれに引きずられ、むしろこれに強迫されて行われたものであるとするものである。第三の見方は、この二つの要因が複合して事件が発生したとするものなので、前二者について論ずれば十分と思われるのでここでは論じない。

結論を先に言えば、張学良の兵諫は、第一の見解のような私利私欲とか、地位の回復のために行われたものでもないければ、また第二の見方のような、中共やソ連の使嗾によって行われたものでもない。もっと高邁な思想的な動機に

よるものと判断すべきである。

第一の見方が正しくないことは、これまで述べて来た事実関係でも分かるが、次の諸点を見れば、更に明確になる。  
う。

張学良とならぶ西安事件の首謀者楊虎城はその動機を次のように語っている。

我々が蔣介石氏を監禁したのは、抗日政策の採用、内戦反対という民衆の希望を容認させるためであった。

……張学良が八〇〇〇萬元を要求したという様な説も、単に風説にすぎまい。……蔣氏が抗日に目覚めたので我々の軍隊も彼を釈放したのである。かくして支那の共同戦線は全く完成された。予は蔣介石氏が、真の抗日戦線のリーダーたることを確信している。(一九三七年一月四日付東京日々新聞上海特電)

張学良自身は、一二月一三日の麾下将兵に対する、蔣介石監禁に関する経過報告演説の中で、次のように述べている。

外敵日に迫まるこの時に、銃を取って、国土を守ることが許されず、自国民と戦うほど苦しいことはない。

……われわれの今度の行動は、個人的な榮辱・生死を完全になげうち、すべてを国家・民族のために献げるものである。……国家の危機を救うためには敢えて決行しなければならなかったのである。……委員長に私怨をもっているのでもなければ委員長個人に反対しているのでもない。委員長の見解と方法に反対し、反省を求めているのであって……委員長がこれまでの見解を捨て、毅然として抗日戦の陣頭に立つならば、われわれは絶対に彼を擁護し、彼に服従するであろう。その時、彼が今度の行動を叛乱と考え、われわれを罰するとしても、われわれは必ず泰然としてそれを受け入れねばならない。……目的が達せられさえすれば、他のことは問題ではないので

ある。……今度の事件は、実にわが国家・民族の興亡にかかわる。諸君は全力を集中し、格別の努力を払ってほしい。全員が最大の決意を持って国家民族のために献身してほしい。

私は、わが中国に復興の能力がないなどは信じない。わが中国に離脱し得ぬ軀があるとも信じない。同志諸君、われわれが過去の誤りを承認し、同じ誤りを絶対に繰り返さぬようにするなら、中華民族にもついに自由解放の日が来るであろう。

さらに一二月一九日には、ザ・タイムズの論説に次のように反論している。

「個人的または、略奪的野心の愛好」とか、「いい条件をひっぱり出そうとする望」とかは、まったくありません……中国の政策を決定的に変えるという保証を取り付けようとしたものにすぎません。「即ち」祖国防衛のため武器をとって立ち上ること、何百万という中国人の生命、財産を途方もなく浪費している、あの絶え間のない内戦に積極的に終止符を打つこと……匪賊の追求を止めることです。……彼等は、意見が違ふということだけで、中国人に変わりはありません。しかしどんなに悪く見積つたにせよ、祖国に対して日本人ほどの脅威を与えるわけではない。……中国の力が中国人民に対してではなく、侵入してきている敵に対し向けられる事を要求しているのです。<sup>⑧</sup>

さらに張学良が無私無欲、ただ国家の運命を憂えて兵諫の挙に出た事は、蒋介石の南京帰還に同行しようとした際に述べられた彼の言葉の中に如実に現われている。南京に行くこと不利になるから西安にとどまれという蒋介石の言葉に対して張は「私には上京する義務があります。すでに西安の指導部に今度のことは全部私が責任を取る、と言ってあるのです。それだけではありません。今度の事件には、委員長に危害を加える意思も、クーデターの野心も無かつ

たことを示したいのです。」と答えている。この言葉に対して宋美齡は「叛乱軍の最高責任者が国法の裁きを受けるために、自分から上京したいと申し出た、こんな事は、中華民国成立以来一度も無かつたという事です。これこそ、中央政府が張学良の罪を免じた真の理由なのです。」と西安事件回想録の中で述べている。

第二の見解が誤りであることは次の諸点を見れば、自から明かである。

張学良は、日本の刺激によって、若くして燃えるような、抗日意識を持つようになり、すでに、北支の指導者になる前後から、中国の若き国家主義者達を庇護して来た。その彼が民族的危機に際して、同胞相搏つ無意味さを体験し、中共の人民国防政府樹立、人民戦線結成の呼かけに応じて「連ソ容共」、「対日即時宣戦」、国民政府改造の行動に出たとしても不思議はない。しかし、それは、あくまでもナショナリストとしての立場に立つてのことであって、共産主義者としてではない。それは、蒋介石が述べているように、「元来、張学良は、抗日報復の意識が非常に強く、中共の勢力を利用し、一致団結して、日本にあたろうとする考えであった。……中共が停戦抗日を呼んでいるのは、愛国の至誠から来たものと思っていた。」<sup>⑦</sup>からである。すなわち、張学良は、中共やソ連の使喚によってではなく、自からの思想と信念に基づいて、中国紅軍と共闘しようとしたのである。

また、蒋介石の逮捕が、中共との共謀ではなく、張学良自身の考えに基づくものであることは、以下に述べることで明らかとなる。

エドガー・スノーの中共雑記には、中国共産党は、蒋介石が逮捕された報を受けると保安において大祝賀会を開催した。この祝賀会の席上で、毛沢東は、蒋介石を反逆者として、人民裁判にかけることを要求し、その提案が採択され、町中が喜びで湧きかえった。

毛沢東は一四日に、モスクワからの「蔣を釈放せよ……蔣の釈放に尽力せぬかぎり、モスクワは中共を〈共匪〉として弾劾し、世界環境の中で、絶縁する。」との指令を受けた時、真赤になって怒った。指令を受けるまでは、共産党は蔣介石を公判にかけ、西北抗日防衛政府を樹立する計画であったからである、と記している。また西安に飛んだ周恩来は、はじめは蔣の公判を主張したが、モスクワからの電報を受けるとその主張を変えたと記するとともに、張学良は、周恩来にも、他の共産党員にも知らせずに蔣介石を釈放し、彼等を失望させたとも述べている。

また当時のソ連外交部は、モスクワ駐在の英米各国大使の間に対して「西安事件は、日本の陰謀であって、ソ連は事前に何も知らなかったし、賛成もしない。」と答えている。一九三六年一月四日のイズベスチャの社説と同一五日のプラウダの社説は、ともに、「西安事件は日本の陰謀であって、モスクワは関係していない。」とのべている。

これまで見てきた通り、西安事件は、孔祥熙が言うように「〔日本の〕二・二六事件と同じである。青年将校が蔣介石を監禁したのも、国を愛すればこそ」やむにやまれず行なったものである。張学良は、国民の前に立って裁判を受け、有罪の判決が下れば、如何なる処罰にも甘んじて服し、国家に有利なれば、万死も辞せず、と断言したのみか、蔣介石に同行して南京に行っている。この事実だけを見ても、西安事件は、支那の主権と平和の回復の為に、内戦を停止し全中国が一致して日本に対抗するための体制を作る為に、張学良が私心を捨て、生命を投げ打ち、憂国の至誠を持って彼自身の救国の思想、信念に殉じた兵諫といえよう。このような観点からすれば、兵諫の結果が志とは違つたとしても、張学良は、中国近代史を彩どる憂国の志士の中の屈指の人物といえよう。



注

- ① 白雲莊主人『張作霖』昭和出版社 昭和三年 一二九頁
- ② NHK取材班 臼井勝美『張学良の昭和史最後の証言』角川書店 平成三年 二五〇―二六頁
- ③ 段祺瑞、徐樹錚を中心とする、いわゆる安徽派に対抗して、馮国璋、曹錕、呉佩孚等のいわゆる直隸派の勢力が台頭し、七月一五日両派の抗争が起り、京漢線長辛店方面で砲火を交えたが、安徽派は一敗地に塗れ、一九日、段は辞職した。かくて呉佩孚の実力が、北方を圧倒した。
- ④ 波多野善太『国共合作』中央公論社 昭和四八年 一九二頁
- ⑤ 吉本浩三『張学良の横顔』赤燼閣書房 昭和七年 五頁 NHK取材班前掲書二二頁
- ⑥ 同書三六―三七頁
- ⑦ 同書三七頁
- ⑧ 日本国際政治学会『太平洋戦争への道』第一卷 朝日新聞社 昭和三六年 三二〇頁
- ⑨ 鹿島平和研究所『日本外交史』第一七卷 鹿島研究所 昭和四六年 二二六七頁―二二六八頁、 臼井勝美『日中外交史』塙書房 一九七一年 一五九頁
- ⑩ 前掲『日本外交史』第一七卷 二二六七―二二六八頁
- ⑪ 同書二六七―二二六八頁
- ⑫ 橘樸『中華民国三十年史』岩波書店 昭和一八年 一七三頁
- ⑬ 市古宙三『中国の近代』(『世界の歴史』第二〇卷 河出書房 昭和四九年) 二八一頁
- ⑭ NHK取材班前掲書九五頁
- ⑮ 吉本前掲書二五〇―二五一頁
- ⑯ NHK取材班前掲書九六頁
- ⑰ 同書九六頁、吉本前掲書一四―一五頁
- ⑱ 橘前掲書一七四頁 芦田均『最近世界外交史(3)』時事通信社 昭和四〇年 三二九―三三〇頁
- ⑲ 橘前掲書一七四頁

西安事件の原因に関する一考察(永橋)

- ⑳ 張学良の言葉によれば「満鉄と競争するためではなく、自分の大豆を自分の鉄道で運びたかった。」のである。(NHKとのインタビュー)
- ㉑ 梨本祐平『中国の中の日本人』同成社 一九六九年 六四頁 橋前掲書一七四頁。前掲『日本外交史』 一七巻 三二六頁。
- ㉒ 松本一男『張学良と中国』サイマル出版会 一九九〇年 九三〜九四頁
- ㉓ 太田宇之助「風雲児・張学良」(『中央公論』五九〇号 昭和二年) 四一六頁
- ㉔ 森田正夫『汪兆銘』興亜文化協会 昭和一四年 三四八〜三五〇頁 中山峯太郎『新中国の大指導者汪精衛』潮文閣 昭和一七年 一八九頁
- ㉕ 森田前掲書三五二頁 汪兆銘著 河上純一訳『汪兆銘全集第一巻』東亜公論社 昭和一四年 三七八頁
- ㉖ 易顕石・張徳良著早川正訳『九・一八事変史』新時代社 一九八六年 一三七頁
- ㉗ 同書二二九頁二四九頁には「日本人がどんたごころを占領しようと、それにかかわらず、すべて日本人の占領するところになしたらしい。我々は不抵抗主義だから。」とある。James M. Bertram, *Crisis in China—The Story of the Sian Mutiny*, Macmillan and Co., Limited, London, 1937. 岡田丈夫他訳『西安事件』太平洋出版社 一九七三年 七一頁
- ㉘ Edgar P. Snow, *Red Star Over China*, Grove Press, Inc., New York, 1968. 松岡洋子訳『中国の赤い星』筑摩書房 一九七六年 一五頁
- ㉙ 松本前掲書二二三〜二二四頁
- ㉚ 西河毅『周恩来の道』徳間書房 昭和五一年 一五二頁
- ㉛ 波田野乾一『現代支那の政治と人物』改造社昭和二二年九七頁 前掲パトラム『西安事件』七三頁
- ㉜ 松本前掲書二二五頁
- ㉝ 同書二二五頁。長野広生『西安事変』三一書房一九七六年二七頁
- ㉞ Edgar Snow, *Far Eastern Front*, Jarrolds, London, 1934. 梶谷善久訳『極東戦線』筑摩書房 一九八八年 一一六頁
- ㉟ 蔣介石「動乱の波に漂ふ支那及日本」(『中央公論』昭和十年七月号) 一五四頁
- ㊱ 萱沼洋『中国革命四十年』福村書店 一九五四年 三四頁

- ③7 松本前掲書一三四頁
- 長野前掲書 六一頁上段、パートラム前掲書(邦訳) 一三一頁  
右に同じ
- ③9 馮玉祥著牧田英二訳『我が義弟蒋介石』長崎出版 一九七六年 五二頁
- ④0 松本前掲書 一四一頁を参照
- ④1 東亜研究所『支那近代百年表草稿』東亜研究所 昭和一六年 三六五頁
- ④2 波多野乾一『現代支那の政治と人物』改造社 昭和一二年 四二〇頁
- ④3 前掲エドガー・スノー『中国の赤い星』(邦訳) 一七頁
- ④4 Jerome Chen, *Mao and the Chinese Revolution*. Oxford University Press, 1965. 徳田教之訳『毛沢東』筑摩書房 一九七一年 一八〇頁
- ④5 尾崎秀実「張学良のクーデターの意義」(『中央公論』五九〇号 中央公論社 昭和一二年) 四〇九頁上段
- ④6 張学良「西安事変懺悔録」(前掲長野広生『西安事変』) 五七〜五八頁
- ④7 波多野乾一「共産党と支那」(竹内夏積『支那の全貌』信正社 昭和一二年) 二〇〇頁
- ④8 前掲『国共合作』二〇二頁
- ④9 NHK取材班前掲書 一六九〜一七〇頁
- ⑤0 長野前掲書 七九頁上段
- ⑤1 松本前掲書 一四九頁
- ⑤2 NHK取材班前掲書 一七四頁
- ⑤3 松本前掲書 一五〇〜一五一頁。長野前掲書八五〜八七頁に見るように、周・張会談の日時については説が分れて特定できなない。前掲エドガー・スノー『中国の赤い星』(邦訳) 一八頁 高木建夫『中国革命史談夢と爆弾』番町書房 昭和四七年 三二三頁下段、孫銘九の証言(NHK取材班前掲書) 一七四頁一七六頁
- ⑤4 梨本祐平『周恩来』勁草書房 昭和四二年 一六二〜一六三頁
- ⑤5 松野谷夫『中国の指導者』同友社 昭和三六年 一三七〜一三八頁

- ⑤6 長野前掲書 一五四―一五五頁
- ⑤7 蔣中正『蘇俄在中国』中央文物供應社 中華民國 四五年 七二―七四頁 蔣介石著毎日新聞外信部訳『中国の中のソ連』毎日新聞社 昭和三年 五三頁
- ⑤8 長野朗『支那の低気圧西北問題』(『外国の新聞と雑誌』第三七〇号 日本読書協会 昭和二年) 五六頁
- ⑤9 朝日新聞東亜部『新段階に立つ中国政治』月曜書房 昭和二年 一八四―一八五頁
- ⑥0 前掲エドガー・スノー『中国の赤い星』一八―二二頁、高木前掲書 三二八―三二九頁
- ⑥1 前掲長野広生『西安事変』一五六頁
- ⑥2 同書 一六二頁下段
- ⑥3 松本前掲書 一五三頁
- ⑥4 前掲バートラム『西安事件』一三六―一三七頁
- ⑥5 前掲バートラム『中国革命の転機』一一二頁
- ⑥6 石丸藤太『蔣介石』春秋社 昭和二年 三四五―三四六頁
- ⑥7 同書 三四七頁
- ⑥8 事件当時の記事の多くは、東北軍を綏遠に移駐させようとしたとあるが、張学良は、これまで常に綏遠に行つて戦いたいといつていたので、この場合は、福建省に移される事に不満を持ったと見る方が正しいと思う。赤松祐之『昭和一年の国際情勢』日本国際協会 昭和二年 二八三―二八四頁 山田實彦『中国の近状を報告す』(『改造』二月号 改造社 昭和二年) 二二三頁
- ⑥9 松本重治『西安事変の中間報告』(『改造』二月号 改造社 昭和二年) 八〇頁 宋美齡『西安のクーデター』(高山洋吉訳『新東亜の初幕——西安兵変実記——』育生社 昭和四年) 二二頁
- ⑦0 萱沼前掲書(六二頁)には、一三日に張学良自身が自家用機で周恩来をつれて来たとある。前掲波多野乾一『現代支那の政治と人物』(四二四頁)には一七日とある。
- ⑦1 蔣介石『西安の半月』(前掲高山洋吉訳『新東亜の初幕』九七―九八頁
- ⑦2 石田盛雄『支那動乱の真相』(『雄弁』第二八卷第二号 講談社 昭和二年) 一二八―一二九頁。田中忠夫『支那現下の

政治動向』学芸社 昭和十二年 一四〇―一四二頁。長野朗「西安事変と其後の政局」(『外国の新聞と雑誌』第三六九号 日本読書協会 昭和十二年) 五四―五五頁

⑦③ 浅野要「張学良クーデターの検討」(『日本評論』第二二卷第一号 日本評論社 昭和十二年) 二頁

⑦④ 石丸前掲書 三四六―三四七頁

⑦⑤ 山上正義「学良の叛乱と南京政府」(『文芸春秋』第一五卷第一号 文芸春秋社 昭和十二年) 一七二―一七三頁 浅野前掲書 二頁

⑦⑥ 張学良のロンドン・タイムズの中国通信員フレイザー宛電報

⑦⑦ 蔣介石「中国の中のソ連」毎日新聞社 昭和三年 五八頁

⑦⑧ 南京到着後に、蔣介石に宛た張学良の書翰(佐藤俊三「支那を支配するもの」大阪屋号書店 昭和一七年 四三九頁)、前掲バートラム『西安事件』(邦訳 一六五頁を参照)。